



成飛圖說

伊藤  
篤郎  
大記

十二

特別  
三  
2442  
12止



2442  
12

成形圖說卷之十二

目錄

水利

附旱潦

堤防

堰埭

柴柵

石籠

附捷

板杙

陂塘

附架槽

瓦竇

成形圖說卷之十二

昭和十八年  
一月二十七日  
購



よく天より降る水と雨とありて天の水の約するゆゑ  
已固り葉るハ雨と天の水とより又大洋海ハ雨と  
らさふものとしてさうは天日の光ハ六合り照るは  
るしいとて四方の國々ハ寒暖の差ありことごとく  
大海のあり地外と環て壤よりと多しとあれども地は  
高下燥湿の差ありて穀ハ高仰ハ泉多く山上ハは竹と  
何由金剛山ハ七千五野乃西ハ山あり東ハ陽城文を  
山上も多しありぬし西ハ山あり東ハ陽城文を  
水あり人皆ハつふお及もと竹ハ鳥獸とつとて悉く  
皆天日の御蔭ハ照るとして生養ぬるものあれと  
本草ハもまもる天日ハ向ぎハありて水と相

との天日とてあてとあすしきことなるは謹按ハ火水  
ハ天地の神物日月の靈氣あり凡有生の属ハ二の元氣  
よ由て起ると致やり故ハ人畜より以て精の金石草木  
よももして火水の二ハ値とすは増減変化してそま  
はるは異邦の流れて来るの植生ハ五金と人とも同し  
ら況況や陰陽乃各自のみに又五行とありてありとい  
ふハ水火とていして本金とて配ハ我ハ土の君哉ハ  
形質とてハ我 邦のむりハ多しとあり凡天と熱燐  
とし中土と地と紙とを日とあるの靈ハ異と名





何の如く上より天日此火氣みさかりて照りて遠くあまの  
 ちりくと蒸きつるごとく火乃温胸あるれハ物生し  
 ことしされを北より南ハ人間も多く出生し此等七地  
 是に同じて穀と殖ゆゑ水土の利常と暖地ハ偏て寒土  
 に關ぬ去るれハ水氣を常に北よりありて稻種を播き其  
 米實つりよ味もくまり故ハ人の氣質も北方ハ強く  
 南方ハ弱し凡南ハ一偏は寒ハ強柔也一偏は暑ハ去るれ  
今之の報夷人ハ多しと云て日本と古ハ報朴あるハ  
彼りことくありしと云て私ハ摩り想ハ氷炭と  
日本中土と報夷の偏土と何とて人物とくべとの  
北夷ハ古の遠祖傳る事ハありけり 今清王の遊乃地

に都や一ハ北虜と漢の遠東より南方ハ深  
 是さるにあり是ハ大都會地ハ北方より遠ぬれハ南方  
 一財散せと朔方に民聚りて偏安ありやうの爲なりと  
 いへり○山堂肆考云三代以上天運主於西北故戸口莫  
 盛於西北舜禹分天下爲十二州淮漢以北居其九淮漢以  
 南居其三周公分天下爲九州淮漢以北居其七淮漢以南  
 居其二三代以下天運主於東南故戸口莫盛于東南西漢  
 元始當天下十之一東漢建安當天下十之二西晋太康當  
 天下十之三唐開元當天下十之四宋元豐當天下十之五  
 是蓋天運を用て偏と云 本邦の在昔と夷攷や付 天











以浸福田萬餘頃分疆刊石使有定分公私同利衆庶賴之  
號曰杜父○水の指川といふハ陰陽早潦と云はるりて  
みれり多方を按撫するころより五六月忠實田に水の  
深さ宜敷おれしく二寸許あらずハ端よく實のりあり是  
赤土上田此地より中田を一歩歩み水三寸あらずハ  
あらず多し下田ハ四寸あらずハ大率と云○旱魃の患和漢  
極難と云萬葉の歌に雨降む日の連ハ樹し田を播し畠  
を朝毎に萎枯過と詠也後漢書獻帝時三輔大旱帝避正  
殿請雨遣使者洗囚徒原輕繫是時穀一斗五十萬豆麥一  
斛二十萬人相食啖白骨委積帝使御史侯汝出太倉米豆

為飢人作糜粥經日而死者無數帝疑賑恤有虛乃親於御  
座前量試作糜乃知非實使侍中劉艾出讓有司於是尚書  
令以下皆詣省閣奏汝侯汝考實詔曰未忍治汝於理可杖  
五十自是之後多得全濟○新儀式曰若四月以後八月以  
前久不降雨必有請雨之事中引神泉之地水灌京南之田  
凶災旱尤甚農業多損或降詔命器減除服御常膳之物又免  
調庸租稅之未納又遣使諸社奉幣祈請就中丹生貴舟二  
社別令祈禱或令奉黑毛馬基長の歌に神垣小引弱の色  
乃危尼とて雨雲さくら一丹の川上ト部兼俱記曰  
月炎天連日萬物衰色又曰八九月間淫雨不霽必有祈霽  
詔奉官幣於十九社



以てさるとおのつゝ善利あるそがうちになんか  
と言ふおのを言ふといふ身は言の通る言は言霊乃  
さきもふさるる葉の厚まるといふめわさうるふん  
とさぬふさるるあやとてかざり張皇してあらくい  
のふしつんかかかかかかかかかかかかかかかか  
くの奇もかかかかかかかかかかかかかかかかか  
れともそのさばさばさばさばさばさばさばさばさ  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ  
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
いふ一の類とて子とせのさいお人のよき見りるん  
ふと葉も月日とせよまきくかばくで花をみぢおを昔  
今何よよのけ何れまきくかばくで花をみぢおを昔  
原寧樂ふどのみまままままままままままままま  
いれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ  
げりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
のふさく河推りふいさかあかあかあかあかあかあ  
てはまのふさく河推りふいさかあかあかあかあかあ  
てはまのふさく河推りふいさかあかあかあかあかあ

根で里に出さき海と海りて國を別んりめく世の中  
ふさく物さく事れくいさばくあかあかあかあかあ  
けぞゆらぎさささささささささささささささささ  
ちま也し古の安國の屋はらちよよ上の大通の神は  
どもありあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
のぐらむあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
ぬと吾見てとく一のなまぬの番を山の子のさる  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ  
子もぐらむあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
こももあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ  
夫ハ福りぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ  
り男とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ  
むあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ  
子あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ  
さつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ  
いれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ  
いとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
しきとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
ろとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
のふさく河推りふいさかあかあかあかあかあかあ

ふんとつづべられどとハ々サしくとらるる事あり人  
のふと巧むはく言はまおとせしとわごとく事あり  
を人の巧むはく言はまおとせしとわごとく事あり  
今集集へ下りて言ふはつしこの地をわかれて代々の人  
た々集集と事の有るはつして言ふはつしこの地をわかれ  
のふと巧むはく言はまおとせしとわごとく事あり  
ゆゑめてまはたよふふり世間と見わくさむおとく  
一風は量るはく言はまおとせしとわごとく事あり  
よして量るはく言はまおとせしとわごとく事あり  
風月の流とけけりしじりし延喜三年卜部兼直伊勢へ  
の動はうけたまはりし事自と雨晴を言る事あり  
こと言て行務しけりし事自と雨晴を言る事あり  
らへよあきけけりし事自と雨晴を言る事あり  
の対より雨とけけりし事自と雨晴を言る事あり  
きたきおとくに思ふありと新執権み載らと事あり  
さんとかく詠ハよかりん神と感納や海し海さんと事

にふあつてつあさんまは得しと事あり  
ふ地ふ地に思神もあつて事あり  
は雨降時と事あり  
地西國よて執事の上使はあり  
りて晴と事あり  
子何ん偶々と事あり  
地常ん凡下の所及はあり  
會諸生學宮講經詢政僚屬間有不善反復告誡俾之自新  
民輸租俾自粟量聞者相告宿連亦願償訟至庭溫詞曉以  
境以送之思之如父母饒久旱入境而雨湖積霖入境即霽  
は先彦此奇也國の爲の爲の爲の爲の爲の爲の爲の爲の爲  
しう即すも奇なりまはて遂に雨と事あり  
て言極る事あり  
成形成圖說卷之十二  
十四  
韓事品彙曰朝

鮮大旱洪水の時止雨請兩國王親々勢海より郡野 野  
 ては地頭祭りて虫蠅と祭る夫とをけり又沖繩玉城間  
 切玉城キタキ玉井とて靈泉あり國王毎年雨請の事あり  
 先年沖繩早の時國王の縁を歎かして志と民の多業乃  
 りれは故のまれとて和のまつくの神に詠して大雨  
 傍定り河海つくハ海祇とてけありハ豊見城高嶺  
 ありとて山嶽時て故城の址多しけありハ明如年申潮平  
 親雲上土佐の大島一深着也一附の活也海祇ハ豊玉彦  
 城ありとてくろれ古事記吾掌水とてけハ祈雨の事也  
 官ありとてくろれ和訓聚と出せり事ありとてけ

後此より載り文德實錄曰嘉祥三年詔以武藏國奈  
 良神列為官社先是彼國奏請和銅四年此神社之中忽有  
 涌泉自然奔出溉田六百餘町民有疫癘而愈人命所繫不  
 可不崇祀之按奈良神社ハ田道の靈社也田道ハ仁  
 伊寺の水門子戰死に靈大蛇と化して遂に蝦夷と亡せ  
 る今又奈良神水旱疾疫大に民に功德あり其靈神の赫  
 著觀るべし但享和辛酉六月陸奥國牡鹿郡蛇田村子田  
 道公の墳を土中子獲と云むの故者しと云む所也巨勢子は蛇  
 田村の名縁子遠徳葛城長田其地野上子既水難至荒人能  
 人皇極御時遠徳葛城長田其地野上子既水難至荒人能  
 解機術始造長城川水灌田天皇大悅賜子槭田臣姓此等  
 或は官社と列收或は姓氏と賜ふ等水列と重り子あふ坂也  
 かし身日向法縣郡馬関田郷柳水流とてけ村の谷り  
 縁ハ湮乳とありとてけ寛政八年累の根是より忽法



水大に涌出たりて水勢福田于斜の用ありと既以無し  
 凡源委ありて所より泉の湧出たりてははるる乃地中  
 循環ありと云ふなり又古事記に御井神何事なり  
 井城作て民の利と無しと云ふ御功ありしと云ふ事  
 あり  

 玉曆云凡欲穿井處於夜氣清明時置水數盆  
 於其地者何星光最大而明定必有甘泉五雜  
 組云遇深山無泉之處掘井一二丈不得水者可束蘆薰之  
 而密覆其上火烟不得出必尋泉脈際處潛通即它山數里  
 外泉皆能引而致之烟通則泉派矣北征錄云尋泉入山遠  
 道及砂磧之處乏水者掘一穴容一二石許用濕蓬艾滿中  
 燒之猛火而閉一小穴相通四望之但見烟出之處不論遠  
 近掘之得泉肺也妙哉石山中即近石掘之如山即草木掘  
 之砂磧擇高處掘之此能救急但烟出多水惟深更妙亦但  
 尋煙出處皆有水一食頃烟未出者再開一穴求之無不得  
 泉肺也宜博志之朝鮮師律提綱云營邊如無水者以地中  
 掘井取水又

詩聖獸踪跡去路不遠有水如遇緊急水隨行者須用羊皮  
 渾脫盛之或大葫蘆亦可是字的一件田土沃灌の用あり  
 きの要ありて小集義外書云山は國に立て第一高き  
 禱ありとありし

このよて君の象なり山乃草木つきて土砂の川谷も盛  
 るるよて人の富も其のくまなくおろし  
 洛つきて夏七の玉をぬき木枝くくといり渭洛  
 のつきも教くハ水上地山の草木つきて神氣うき  
 流水の第もくくく大雨とく土砂を為し入て川  
 谷うつみ流るる山とく川源はくめくくあり  
 よいありて流候る地とくまといてと名山大澤  
 は封せ山は気と通し雷雲れ助くは神靈の行程あり

播州備州の海をよけつる教郡のこゝに北の夕立を  
神氣及を播州の淡路島より起る夕立を以て備州を  
小豆島より雨を起り京都近江なほ六月七月の旱も  
夕立を湖の沖氣はよきを京までと夕立おふ  
れ里を北よつてきて涼山多しそのちり高の崇巖り  
さまりこれに靈氣あは淡路島のこゝを京までと夕立  
ハ神氣も残りあはれを神氣しうせし又々竹法園  
共々松のや好ハ本をばらやまを中よき松山ハ多  
志りてと神氣のきりけふをばらりし松山あは下  
字生をさるる道と出を松よかゝるる海雨露田島入

てハ毒とあまのりねハ浦淡ふくよ相懸乃本より山を種  
本よ志くハなし紳書曰越前松原某代よりりて國乃  
東南よあつる白山より今居つてきり海に里をり  
よふ十里をて美濃路へつてく山あり本をきけよと  
いふがかりなし此山と二万をきりて新まてとやむ  
よのり國ハ日よおとらつての地をそて既よや  
さるる山に奉り集まはるる山をいふそ  
のなをといハ城下亦橋川乃海ハかつこ川とあ此  
川の生るハ波のより空してまをきりてきり水  
さるるハ亦橋川おひくく出りてと亦橋

わらざるにこれハ山園乃大雪なりといふも其の下  
岩乃も海へ入りつゝハ春よふれども其の指乃雪  
解て後漸くは解ゆもやれども雪水かくのごとし  
みのれよとさり拂てよふり積し雪の一時は解来  
らんよハ城下の人家しくを水の申よふりて人氏魚  
とさるししるれどもさるくかハ其入して田畠  
換てゆるといふとさるかりふかしく又此山乃  
雪解ては解ゆハこそ其もさるのてそれを解てハ川  
用ありともして早よても換てふしりの雪一時は解る  
とさるハ其ハ大水なるハ濁りし水早ふりハの換て一二

とさるは其ハ幾万石の換てよふとさるハ其も濁られ  
いふとさるにそのゆやれども也閑田耕筆曰近江彦根  
の陪臣入菅中菅父もその地を檢する時或山家よて  
不納と其にいつて其家の後山ハ林無茂せんと見付  
是と伐旁て代たはかく不納も及ふまよとさる  
む農夫いれこれあてハあわのふせげとさる  
つゝは其も其ハ何の事かといハハ其も其も  
とのやあ日ハは其も其も其のたれハ林なりて防ぐ  
れハ其も其も其も其も其も其も其も其も其も其も  
好むく其れハは其も其も其も其も其も其も其も其も

よふふりそ昔漢のわづいの宮の室あはるはくよとあり  
とふしく是をわづいありてなるあま塞とありう  
これバあはよハふるふとありれとふ也りり  
日凝るハ水氣あるあまよくつむはるハ室雪をえへし  
室むて滝さあま水氣をて清しされハあはるハふあ  
んとして田新成ハ軟かり聞見録云王荆公好言水利有  
小人諂曰決梁山湖八百里水以為田其利大矣荆公喜甚  
徐曰策固善決水何地可容劉貢父在坐中曰自其旁別鑿  
八百里湖則可容矣荆公笑而止予以為類優旃滑稽漆城  
難為陰室之語故書之万の利と況ものありしやかくこ

そありはれ常陸もかりの利口發明と喜て承之と計さ  
るハ洛よハ授七の事目ありて来ぬ按よ山水此制  
いふ一應禁制所損水邊山林産業之勢非只堰池浸潤之本水  
木相生則水邊山林必須鬱茂大河之源其山鬱然小川之  
流其岳童焉爰知流之細大隨山而生夫山出雲雨河潤九  
里山童毛盡谿流涸乾五畿内七道諸國山川海江濱野林  
原等一切收入公私共之但山岳之體或於國為禮事須蕃  
茂勿令伐損中大堰之岳專有禁制小川之山不在禁限因  
百姓憚遠貪近川上山林任意伐採至有旱年溉之苗焦動



くるりおとく死水のまゝあぐを最良の出水の流衛  
 の直子常道は必敗なり○水出て堤お決りし是のとおと  
 く修むし其の力を振て水付あしてお堤と残るゝと  
 多方ハ六六皆修りてよし水の強弱より道は川下を知し  
 度く常道し○堤破損の時腹付上る春ハ川表と背付  
 よいゝと魚し子細草の根をえ懸る秋ハ堤裏と魚  
 しおして冬築する土はハ夏秋より土肥草茂る夏  
 築するハ秋冬よりりて土瘠て弱安し○堤ハ表より柳と  
 う忍魚し何れの本みくも上りきり堤の為よりあし柳  
 ハと優整てよし細草柳ハ堤の腹より丸葉柳ハ土  
 乃根より根を伸て付し柳ハ土

てあめて堤の足堅くするその方葉は柳根を浸しつ  
 つあつと楊の枝ハ土よりさけよいと根を洗て葉れ  
 かいつりお人の身ハ實用 式曰凡神泉苑廻地十町内令  
あつと加のりし 京職栽柳町別七株 又堤の外は荒地あし櫻杉檜栗の樹と  
 植てよし水出する町水付するり兼て栽る免魚し令營  
 繕式曰凡堤内外并堤上多殖榆柳雜樹充堤堰用と是ハ  
 堤井せきの浦子没くるおとまり駿河風土記曰榎田堤  
 每歲仲春秋之望令  
郡民植柳栗日別一千丁丁食充國府師家其食塩  
 充御保由居廬崎海戸三年別防河使令之正事矣 ○堤より  
 柴つあるよハ堤なりあはあし、いりえあおるよ小  
 口築よと魚しけあよも柴付るよいと柴小口と下築よ  
 てハとと葉いとと東人の柴薪ととととり○堤

茅端口のあまり斜ありハあり、大取一倍の法さるつ  
 し天智紀三年於筑紫築大堤貯水名曰水城むりしハ土  
 と築城と云へり然巨川かどの水衝ハよく堤決ふむ  
 びる変ハ其地形に随て二重堤と設べし其交平平日ハ  
 田疇ふかし盡て可出堤を此倚あり凡堤と修繕さるま  
 ハ堤足と堅固なすべし堤の裏土と取べりらむききて  
 川中の高き之の土と固く掘て取べし是と壺掘といへり  
 ○易千丈之堤以螻蟻之穴潰といつり堤は漏あ  
 ハ速に墜へし凡堤の下より各漏あはるまは堤表の下  
 故本竹あくるはこはは刺心これハ水漏あより溜



書紀竟寧  
 加款条  
 堤と云  
 右浦の  
 ちやま  
 つまそ  
 ちとて  
 燈ね道  
 ちや  
 ちやハ  
 さだ

豊浦宮を  
 推古天皇の  
 居の名也  
 成形圖説卷之十二





井井刻和名鈔〇刻ハ壅也凡水子井ト以テ平ニ多シ

為世久新撰井手万葉集〇手

堰埭和名鈔引唐韻堰埭壅水

諸竭以既稻田

著名力Pテイキ

令義解曰堰所以蓄水而不流者也川と築切を方より  
仕出し川の末中あゝ築留勿し大川と築切あは流き所  
あゝ見合勿し是と入に合とつゝ理道要訣云秦以李冰  
為蜀郡太守造百丈堰灌田數千頃蜀以富饒〇川築留か  
流く時ハ土石ふと俵ふ入させ大川の所へ前方より

壅竭字典壅竭以土障水  
也魏志劉馥治吳塘

持ちけ築留し〇川下窪は所ふく押埋ふ水枕てつと  
のせ二方本ふくつらり川の恰好よより足付ふ留し川  
の流分りてより変より十方或二十方と下りて流のこ  
く水枕つてつと流くよ地高の方へ流きむ勿し地  
窪の方へ流きむ勿し方へ水強く流しつられハおの  
つらり窪くもれも上地低き方へ砂を押し込み埭に  
さるうよとつと通鑑魏紀云將濟豫作土豚過斷湖水  
亦作土塍土以草  
裏土築城及填水也  
〇容齋四筆云乾道九年秋贛吉連雨  
暴漲予守贛方多備土囊壅諸城門以杜水入







て作して石と實は魚し着の管とよハ水楊葭葦類と多  
 く植付し根深く是よりて土をかきむあり又黄み  
 保ぐさま所ハ石籬と築出たり是を石癖と云其製  
 損松材とて柱と立一間小とに丈丈する柱と折衝はと  
 貫し或ハ竹とてかきこきハ小柱ともあり内ツルの途と  
 ハ大石中よハ細石と突凸よ石と積ありも長ハ石とよ  
 流すし凡各中よ用るの材ハ部々松とつら松ハ能  
 土と堅て久と堪て朽ぢ又左右と積て石籬と立よハ  
 大小ともあり大女中とよ出して水勢よきつら  
 かるし但水大よ出する河流よきとて土をこきて築まら

くり存籬コケつて籬と飲くゆ水カミ上よ埋籬と深く魚  
 し埋籬ハ水上よ存積とありこも深さより二尺許と  
 深くありて川底の地取より一尺ちとも低くある也  
 うも埋しるも○埋籬のまを圍と川の度候よりけり作  
 ちり埋川表スエめとくしりりり川裏と歌よとて  
 よし○又石籬設ぐるまう籬の根立ふくま流よハ籬の  
 上にもと架してまよ土と積むしかくすれハ重と  
 ちりて籬の根おのれと地よ入るも好し時掘ぐぬよ  
 其○大川と流るよハ川上より路里小川石川ハ川末よ  
 其後ゆし○川中よ出洲置洲置洲置何よハ其海の

左右に掘削と築のふくく石籠をして仕かけぬれば水  
 勢を押しこめて沙洩おのつゝ漢散まりて我柱ハ上の石  
 籠の重きで漸くと土子入ふと深く赤しして千代の裏  
 下も復と泥沙溜りて空海出まるとハくして土沙と  
 早く流さぬし○或日堰埽の堰ハ崩直り行くと堰要と  
 以小川ハ必水行せりたがりてそ所へ水溜り土滞りて  
 溜り川底高く成るとりて流せ支つる多しれよ小川ハ  
 其流の屈曲はゆるに流とあまふ流しきれと  
 是ハ塹溝乃細流の事なり○むし大坂川中の堰も  
 出撥石堤と砌て水勢よくて自疾かきあつゝ不溜り

水攻水の策を設きり元禄中ありては横堤とわく  
 築き撤てそ跡と新開とすゝるに田穀散りて土  
 民之と別とせるとりてりやの事なりとるゝにそ水溜り大  
 和法所の水田もも淤泥せめ侵て溜り沃壤の水田と  
 なる石滄没とまりて復治もなるとるゝにむしりとも  
 是元来ハ水勢を疾して泥沙の壅塞となく急海へ辱  
 くの氷圍と急所とす水勢の急よ毒と没し流と  
 急ても出堤を廢する有る勢緩くまりて泥沙と流の流  
 せよ力なく漸く水上に溜りて田地と漫漶せり







論課不課戶皆令力頭輸之川魚乃出ハ人水いでし時の  
考よし出地也さ向の堤よささるぬるよ葉水乃爲  
てわさるふり位強弱とふせよ○凡久しき雨り浸堤  
さくの崩るハ上より流流さよりて土中より各漏出  
ふれありよそ竹苞タケスギの類を植て土をかゝむるよまも  
あるさならぬハ幾度かてと梅雨ありおるよハまも堤  
る勿し

加世蓋ハト塞

田手トテカ

捷音健溝志武帝自臨下淇園之竹以為捷塞決口ヲ稍々布抽按樹之  
其裏乃以王填之也

蕃名ドインヘルム

凡海川等の堤渚氷食ツキふ所おはふ竹苞オノスギ茅チ城キうノ類  
も宜し古事景行卷白定淡水門又作坂手池即植竹其堤  
也とあり竹城樹ツクられハ土かゝる乃爲なりき畿内河  
功紀曰水至柔而能攻堅凡當其衝者雖鉄石必壞故以力  
爭之者平不能勝焉竹捷柔軟而狎承而制之則水無所施  
其激搏之暴而自得循軌而行貞享中治大坂河也多下竹  
篠分挿接樹以為捷凡一百八十餘丈本邦未嘗聞有為  
捷者今始用之とんんんん然とも景行の御時以竹植  
堤しつゝおと即捷あり但古文簡みして人々捷とると

察々傳耳

水留ミヅドメ古事記

田中井戸

催馬樂歌○鈔ノ田中の井戸ハ池と稱て水と  
ためしむる也ノ水と田よりせしむる井戸  
溜井 水塞 由利ノ開田耕筆ノ田乃多と稱井戸  
ふ也ノ由利と云申ハ井より通ハ利

ハ多ノ

陂塘ノ農政全書○禮記畜水ノ曰

水塘ノ三才圖會昂跨池也  
因地形切下用之ノ蓄

蓄水潦ノ或修築ノ堰ノ以備灌ノ既田ノ畝

蕃名ワアトルコム

亦ヘイフル

溜池ノよも漑くふの田所と池田とノ駿河風土記池田

神社ハ所祭事代主命祈雨祭之とあるりノ之觀る

一正字通俗壅水漑田ノ曰畔田農の法ノ一用水一程物

三介漑之の三つと欠てハ田地多ノ次又五日乾ハ三割

遺ハ十日乾ハ五割換ノる崇神紀ノ多開池塘以寛民業

是今の溜井の始ノり垂仁紀ノ曰令諸國多開池溝數八百

以農為事因ノ百姓富饒天下泰平也ノ是字ノよむては陂塘と

蓄ノハ其流と導ノすて高仰僻隘の地といノてと野ノは溜て

稲田とありゆりゆり水計ノ十所ノの田ノハ引ノ登ノき水ノ五

面平均深ノ三寸懸ノと見えノる溜井ハ山と行ノ毎て堤と

築ノく丸氣ノ為ノす所ノハ申ノ子井と稱ノて多ノと吹ノありノさせ溜

可水乃水勢と助ぎれハ水乾て保<sup>キ</sup>りし或曰溜井と仕  
 立<sup>レ</sup>子埴土と馬臺と半分つく切交を<sup>レ</sup>面<sup>ニ</sup>塗て乾<sup>キ</sup>固<sup>キ</sup>圮  
 圮<sup>レ</sup>は復<sup>タ</sup>塗<sup>ル</sup>を<sup>レ</sup>宜<sup>ク</sup>申<sup>ス</sup>と漂<sup>キ</sup>圮<sup>レ</sup>ど<sup>テ</sup>お<sup>ク</sup>保<sup>ル</sup>を<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>曰<sup>ク</sup>多  
 子入<sup>テ</sup>三月の内雨あ<sup>ラ</sup>ざ<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>埴<sup>キ</sup>身<sup>ニ</sup>早<sup>ク</sup>を<sup>レ</sup>極<sup>メ</sup>付<sup>ル</sup>を<sup>レ</sup>  
 し<sup>カ</sup>は<sup>レ</sup>時<sup>ニ</sup>新<sup>キ</sup>しき溜井ハ水保<sup>ル</sup>ご<sup>シ</sup>天水<sup>ノ</sup>場<sup>ニ</sup>あ<sup>ラ</sup>ハ  
 加<sup>ル</sup>る溜井とあ<sup>ラ</sup>ら<sup>ハ</sup>る<sup>ニ</sup>極<sup>メ</sup>常<sup>ニ</sup>修理<sup>ス</sup>を<sup>レ</sup>し溜井とあ<sup>ラ</sup>く  
 水<sup>ノ</sup>乏<sup>キ</sup>所<sup>ニ</sup>ハ<sup>レ</sup>あ<sup>ラ</sup>ざ<sup>レ</sup>り<sup>ニ</sup>あ<sup>ラ</sup>り<sup>ト</sup>も<sup>レ</sup>い<sup>フ</sup>を<sup>レ</sup>し<sup>テ</sup>川<sup>ノ</sup>流<sup>レ</sup>て  
 お<sup>シ</sup>歩<sup>キ</sup>十<sup>ノ</sup>歩<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>ても<sup>レ</sup>水<sup>ノ</sup>田<sup>ニ</sup>と<sup>モ</sup>あ<sup>ラ</sup>る<sup>ニ</sup>凡<sup>ソ</sup>旱<sup>ノ</sup>損<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>ハ  
 溜<sup>ル</sup>池<sup>ニ</sup>と<sup>モ</sup>埴<sup>キ</sup>と<sup>モ</sup>築<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>地<sup>ニ</sup>燥<sup>キ</sup>土<sup>ニ</sup>あ<sup>ラ</sup>く水<sup>ノ</sup>乾<sup>キ</sup>て池<sup>ニ</sup>水<sup>ノ</sup>た  
 ま<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>お<sup>シ</sup>あ<sup>ラ</sup>る<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>場<sup>ニ</sup>は<sup>レ</sup>堀<sup>キ</sup>子<sup>ノ</sup>枝<sup>ノ</sup>又<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>柳<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>木<sup>ノ</sup>と<sup>モ</sup>埴<sup>キ</sup>て

多<sup>ク</sup>は<sup>レ</sup>一<sup>ノ</sup>畝<sup>ノ</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>フ</sup>て<sup>レ</sup>水<sup>ノ</sup>お<sup>シ</sup>の<sup>レ</sup>つ<sup>リ</sup>溜<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>あ<sup>ラ</sup>る<sup>ニ</sup>又<sup>レ</sup>治<sup>ル</sup>田<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>水  
 損<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>は<sup>レ</sup>田<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>帯<sup>ノ</sup>と<sup>モ</sup>水<sup>ノ</sup>た<sup>ま</sup>は<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>急<sup>ニ</sup>田<sup>ノ</sup>の中<sup>ニ</sup>は<sup>レ</sup>堀<sup>キ</sup>と<sup>モ</sup>埴<sup>キ</sup>水  
 と<sup>モ</sup>埴<sup>キ</sup>池<sup>ニ</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>フ</sup>る<sup>ニ</sup>あ<sup>ラ</sup>る<sup>ニ</sup>田<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>溜<sup>ル</sup>水<sup>ノ</sup>溜<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>あ<sup>ラ</sup>る<sup>ニ</sup>焔<sup>キ</sup>に<sup>レ</sup>便<sup>ス</sup>  
 阿<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup>紀<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>許<sup>ノ</sup>曾<sup>ノ</sup>部<sup>ノ</sup>朝<sup>ノ</sup>臣<sup>ノ</sup>帶<sup>ノ</sup>麻<sup>ノ</sup>呂<sup>ノ</sup>等<sup>ノ</sup>言<sup>フ</sup>大<sup>ノ</sup>和<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>廣<sup>ノ</sup>瀨<sup>ノ</sup>郡<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>疇<sup>ノ</sup>  
 多<sup>ク</sup>數<sup>ノ</sup>灌<sup>ル</sup>溉<sup>ル</sup>之<sup>レ</sup>水<sup>ノ</sup>伏<sup>ル</sup>望<sup>ル</sup>以<sup>テ</sup>公<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>七<sup>ノ</sup>町<sup>ノ</sup>築<sup>テ</sup>堤<sup>ヲ</sup>為<sup>シ</sup>池<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>利<sup>シ</sup>公<sup>ノ</sup>私<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>功  
 食<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>並<sup>ニ</sup>用<sup>ス</sup>私<sup>ノ</sup>物<sup>ノ</sup>許<sup>ス</sup>之<sup>レ</sup>○周<sup>ノ</sup>書<sup>ニ</sup>地<sup>ノ</sup>官<sup>ノ</sup>稻<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>掌<sup>ル</sup>稼<sup>ノ</sup>下<sup>ノ</sup>地<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>儲<sup>ル</sup>畜<sup>ル</sup>水<sup>ノ</sup>  
 以<sup>テ</sup>防<sup>ル</sup>止<sup>ル</sup>水<sup>ノ</sup>註<sup>ス</sup>以<sup>テ</sup>水<sup>ノ</sup>澤<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>地<sup>ニ</sup>種<sup>ル</sup>穀<sup>ノ</sup>儲<sup>ル</sup>畜<sup>ル</sup>流<sup>ル</sup>水<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>陂<sup>也</sup>防<sup>ル</sup>儲<sup>ル</sup>旁<sup>ノ</sup>隄<sup>也</sup>  
 也

械<sup>ノ</sup>書<sup>ノ</sup>紀<sup>ニ</sup>○又<sup>レ</sup>渠<sup>ノ</sup>槽<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>字<sup>ト</sup>訓<sup>レ</sup>注<sup>ス</sup>渠<sup>ノ</sup>槽<sup>ハ</sup>木<sup>ノ</sup>岸<sup>ノ</sup>通<sup>ル</sup>水<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>是<sup>レ</sup>織  
 具<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>梭<sup>ト</sup>同<sup>ニ</sup>也<sup>也</sup>按<sup>テ</sup>玉<sup>ノ</sup>篇<sup>ニ</sup>械<sup>ハ</sup>決<sup>ル</sup>塘<sup>ノ</sup>水<sup>ノ</sup>類<sup>ノ</sup>篇<sup>ニ</sup>通<sup>ル</sup>陂<sup>ノ</sup>竇<sup>ノ</sup>和<sup>ノ</sup>名<sup>ノ</sup>鈔<sup>ノ</sup>引<sup>レ</sup>

杜甫  
 六月青  
 稻多千  
 畦碧泉  
 亂挿秧  
 適云已  
 引溜加既  
 灌更僕往  
 方塘決渠  
 當新岸  
 公私各  
 地着浸  
 潤無天旱



成形圖說卷之十二

三十五

壬二集

山さといハ

と顔の

小田

苗代

くげ極

あは

まの

て

みふ

淮南子決

塘突槓

下槓 古事記○万葉集同し私記土下度槓也按俗田

乃槓 新撰字鏡排 瓦槓 新六帖踏越る道よふせしは

夕ハ瓦槓と瓦竇とを意 下開 尺八尺ハ名源氏後よ

明皇尺八と吹しあり唐逸史よ 尺八ハ名源氏後よ

瓦竇 農政全書瓦竇泄水器也又名函管以瓦筒兩端牙鏗

石檻 以護筒口令於啟閉不然則水湊其處非難於

室塞抑亦衝渲滲漏不能久穩必立此檻其竇乃成 函竇

錢塘湖 陰竇 同上○左傳自其實

石記 入字典竇水道也

蕃名ドイクル 溜池を天水田に倣ふもの多し池の内は尺八と云ふ

尺八のけ孔七八あり十三四と云ふ 尺八を形に

底水道城通し田へ水をりくはなり 彈正式に置槓通水

とあるも下槓と云ふ也 攝津風土記山伏下槓而從此槓

内通云々田子水りるんと云ふ 上一番の槓を扱去

と云ふ尺八の中城廻りて田地一流と云ふ 夫少く是さ

はる第二番目の槓と云ふ かやう小槓と云ふは小槓

と扱畢て下槓池地を水放して 放き流るる夫より又尺

八の槓は挿立るに雨ふるぬ 水滲はふと云ふや唐

白居易錢唐湖后記一名上湖周廻三十里北有石函南有

筧凡放水溉田每減一寸可溉十五餘頃 每一復時可溉五

成形圖說卷之十二 三十六



水の河川の戸を閉ぢるに閉ぢくはりやとさしもの由志石  
 砌と築て川の戸と云ふは二重の戸と云ふは内は板入  
 ぎらあり凡用水の樋一尺四方として水八百所の田と  
 管ふとつり王禎稔論云蓄陂塘以儲之置閘閘以止之  
 ○落堰ハ流す所と堰をくくは多く人力は用も上堰さ  
 らつあり工夫と費や少り少し間敷多きは浅き所を  
 計に掘濬を重し水よく通るを掘さつ一あり工夫と省  
 多る也 落堰ハ流す所と堰をくくは多く人力は用も上堰さ  
 らつあり工夫と費や少り少し間敷多きは浅き所を  
 計に掘濬を重し水よく通るを掘さつ一あり工夫と省  
 多る也 ○患水落堰ハ川下より堰砌て川上と細河下と廣く  
 掘築し是水よく流すを重し心ゆかり ○用もと川落堰

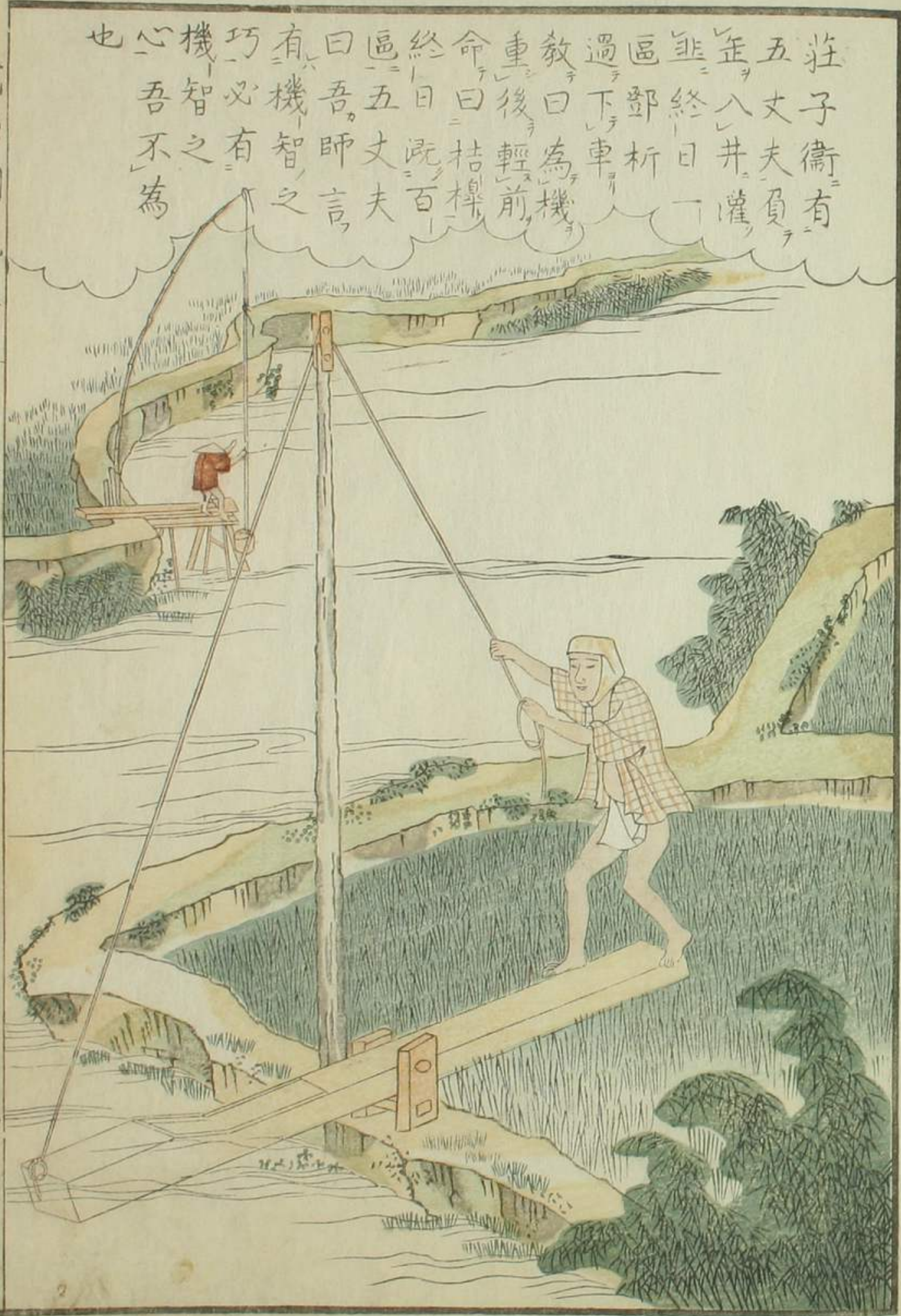
石川上と廣く低く川下と細く高く掘てよしとさ  
 らつあり工夫と費や少り少し間敷多きは浅き所を  
 計に掘濬を重し水よく通るを掘さつ一あり工夫と省  
 多る也 ○患水落堰ハ川下より堰砌て川上と細河下と廣く  
 掘築し是水よく流すを重し心ゆかり ○用もと川落堰

金網井カネツナ書紀カネツナ今言カネツナ絞車井カネツナあり太平記カネツナ摺卷カネツナと書あり  
 弾カネツナ罐カネツナハ金網カネツナに鉄索カネツナを用カネツナあり

桔槔カネツナ亦作カネツナ擗カネツナ莊子カネツナ桔槔者引之則カネツナ  
 俯食之則仰カネツナ通俗文カネツナ機汲水也カネツナ  
 蕃名カネツナヒツトカネツナ上ムル

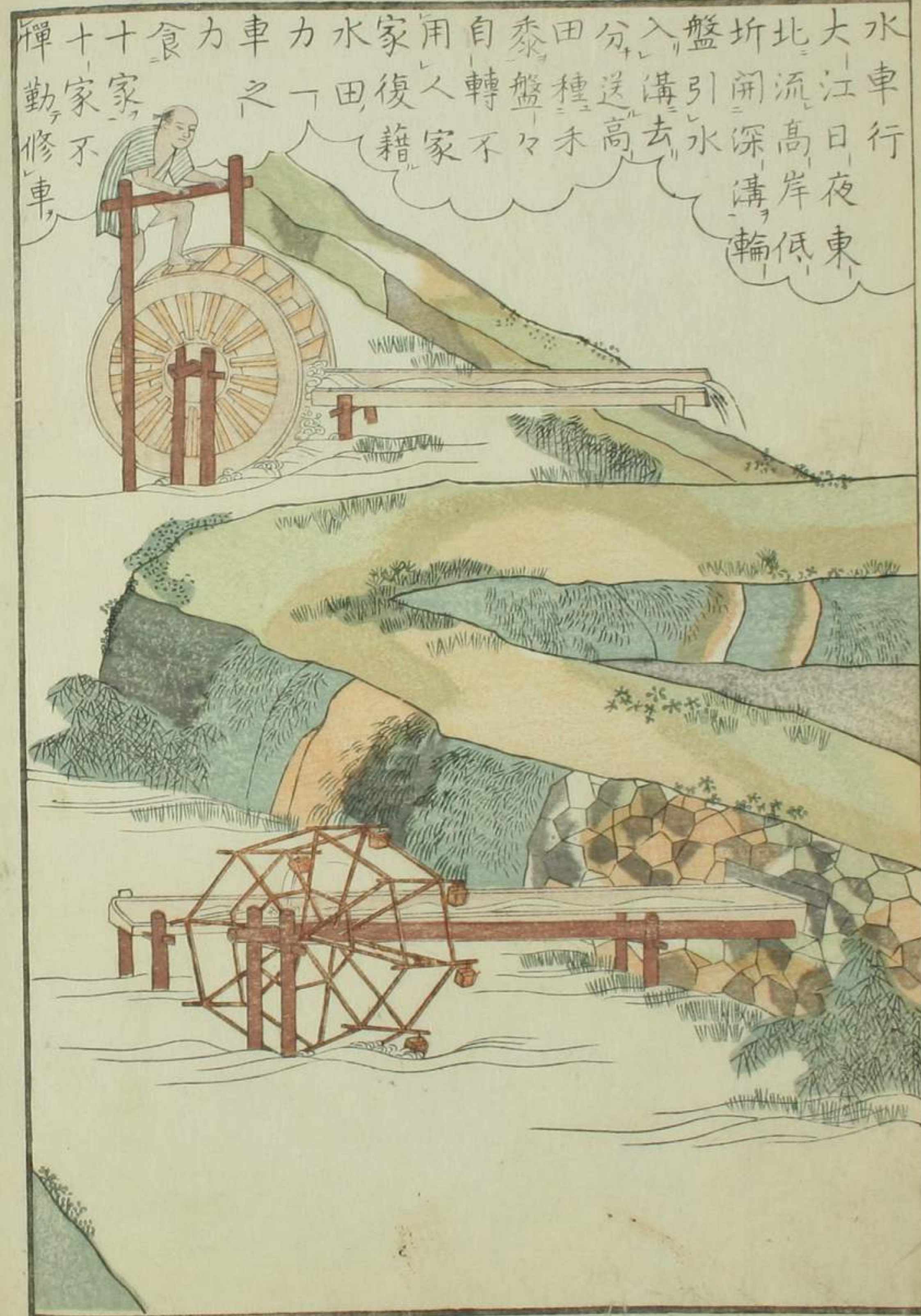
水車ミツクルマ 日本後紀

此ミツクルマの用力少而見功多しと称は然も數千畝の田  
 子水ミツ越盈ミツ立ミツしむるものは升戸シノ多しと取ミツりてミツ地ミツあミツくミツまミツなミツ  
 らミツと川渠ミツ河ミツ所ミツは水ミツ上ミツに架ミツとミツ構ミツて巨竹ミツとミツ引ミツ磨ミツし大桶ミツ  
 と釣ミツめけて槽ミツより田ミツに汲ミツかミツく法ミツよミツろし  
 投ミツ罐ミツ和名鈔罐汲水器豆流閉ミツに訓ミツめり即ミツ水汲ミツ  
 蔓ミツ笥ミツの溜ミツあり笥ミツといミツふミツ閉ミツるミツ水ミツ汲ミツ  
 水斗ミツ品字笈挹水者禮大記木角註角ミツ轉ミツ水ミツ之斗廣ミツ  
 韻肩斗舟中ミツ漂水ミツ器也受今の阿加登利なり  
 蕃名ウエルプミツエミツンミツムミツル  
 此ミツと人相對して其緒ミツ綆ミツ成ミツ執ミツて福田ミツ一擲ミツ既ミツとのミツあり



莊子衛有  
 五丈夫負  
 非終日一  
 區鄧析  
 過下車  
 教曰為機  
 重後輕前  
 命曰桔槔  
 終日既百  
 區五丈夫  
 曰吾師言  
 有機智之  
 巧必有  
 機智之  
 心吾不為  
 也





利宇古志 即龍骨車の約語あり

筒車 三才圖會於一輪之一週水激轉輪衆筒甕 翻車 同上

水次第下傾於岸上所橫木槽謂之天池

云翻車今人謂龍骨車也行道板一條隨槽濶狹人憑架上

踏動拐木則龍骨板隨轉循環行動板刮水上岸又踏車踐

車牛轉翻車牛曳水車等の製あり又龍

尾車恒升車玉銜車と亦斯製あり

蕃名ワアトルモーレン

日本後紀天長六年夏五月太政官符曰大納言安世作水

車云云以為農業之資其以手縛以足踏服牛廻等各隨便

宜若有貧乏輩不堪作脩者有司作給今按以手縛ハ龍

尾車の類もて輪軸のたよく以足踏ハ即龍骨車也服牛

ハ牛轉翻車あり徒然草よ龜山後の泔池よ大井川の水

と引ゆるれむとて大井の土民に仰て各車と造られ

己多の淺と給て數日よ嘗虫して廻りりるよ大く

轉りりきれハねらの里人と召て搦させられはハ

安らくに結てまわらせりりるり思よやうよ轉て各

と汲入るこことていかりりり○夫本集ありあきり

治の川流の各車者とていよとて其は掛は也

駒乃頭 名物六帖○是車の各汲桶板と打て

渴鳥 後漢張讓傳作翻車渴鳥註渴鳥為曲角以木引水上

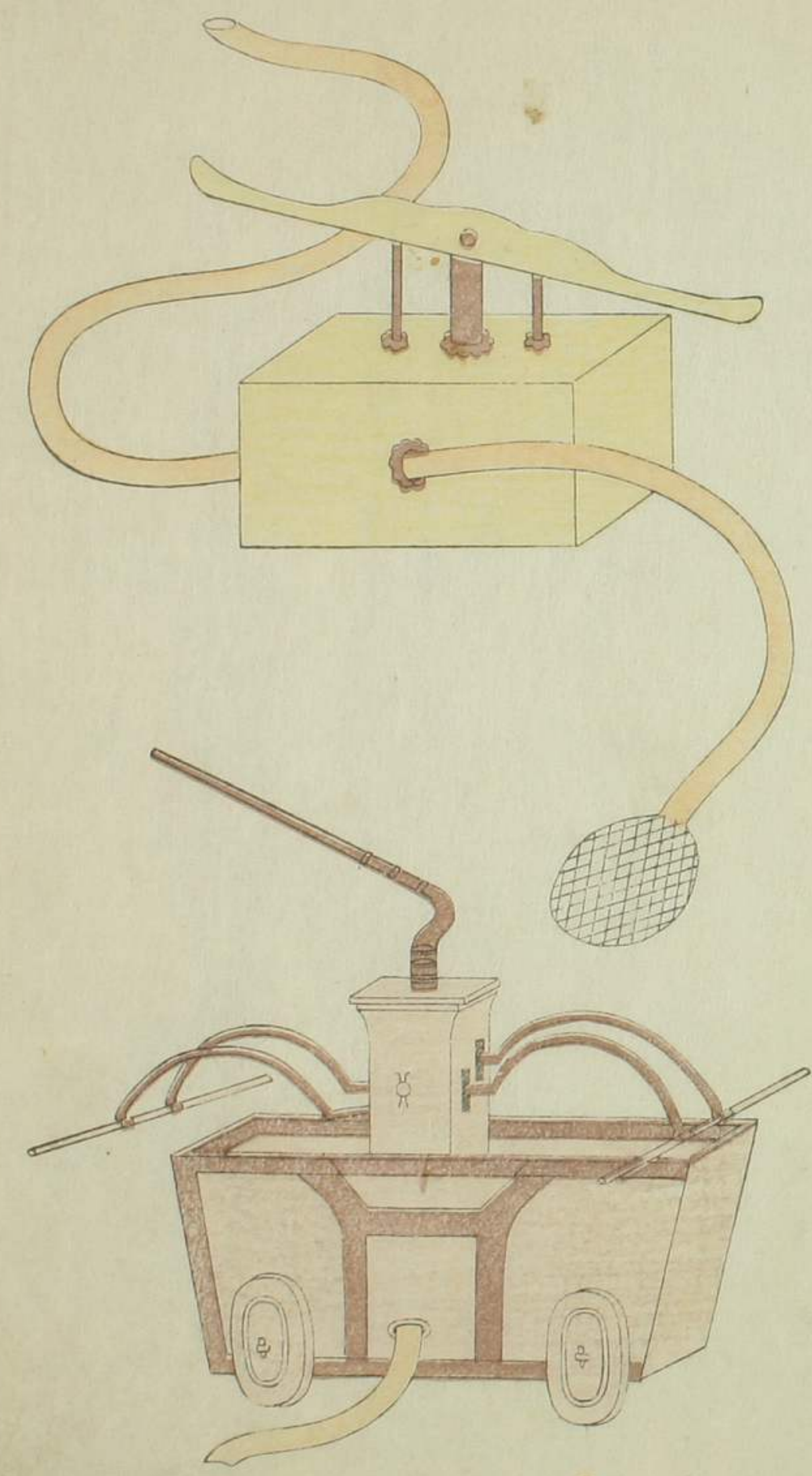
者也○古鳥考畧渴鳥受水之器如鳥之渴飲也○亦

龍並同

蕃名

恒升車ハ俗言龍吐水也其くるま其製ハ革或ハ布ありて  
 囊とこくらく筒のやうして幾十箇ありて其を継ぎて其を  
 の一端と井泉の底に浸して右より鞆をじふして其  
 と吸弁せし上の一隅をけりて所へ振つけ灌ぎかく  
 はたし是龍尾車等の及ぶ所の壁立浮洲の氷をてと  
 此器とてとれハ山よさかのちりや又累よと送るに  
 して其囊子ハ桐油といしと漢密めてみど暖きととと  
 より囊ふれハ屈伸自由な鞆へ流つるりゆゑに遠途  
 坳の田所ともえくをみけりて此器とてとれハ山よさか  
 和蘭の製して蕃名スボイトといなり

恒升車 蕃名數樸以鐸



東坡  
翻々聯  
聯銜尾  
鴉萍々  
確々蛻  
骨蛇分  
畦翠浪  
走雲陣  
刺水絲  
鉞抽稻  
牙



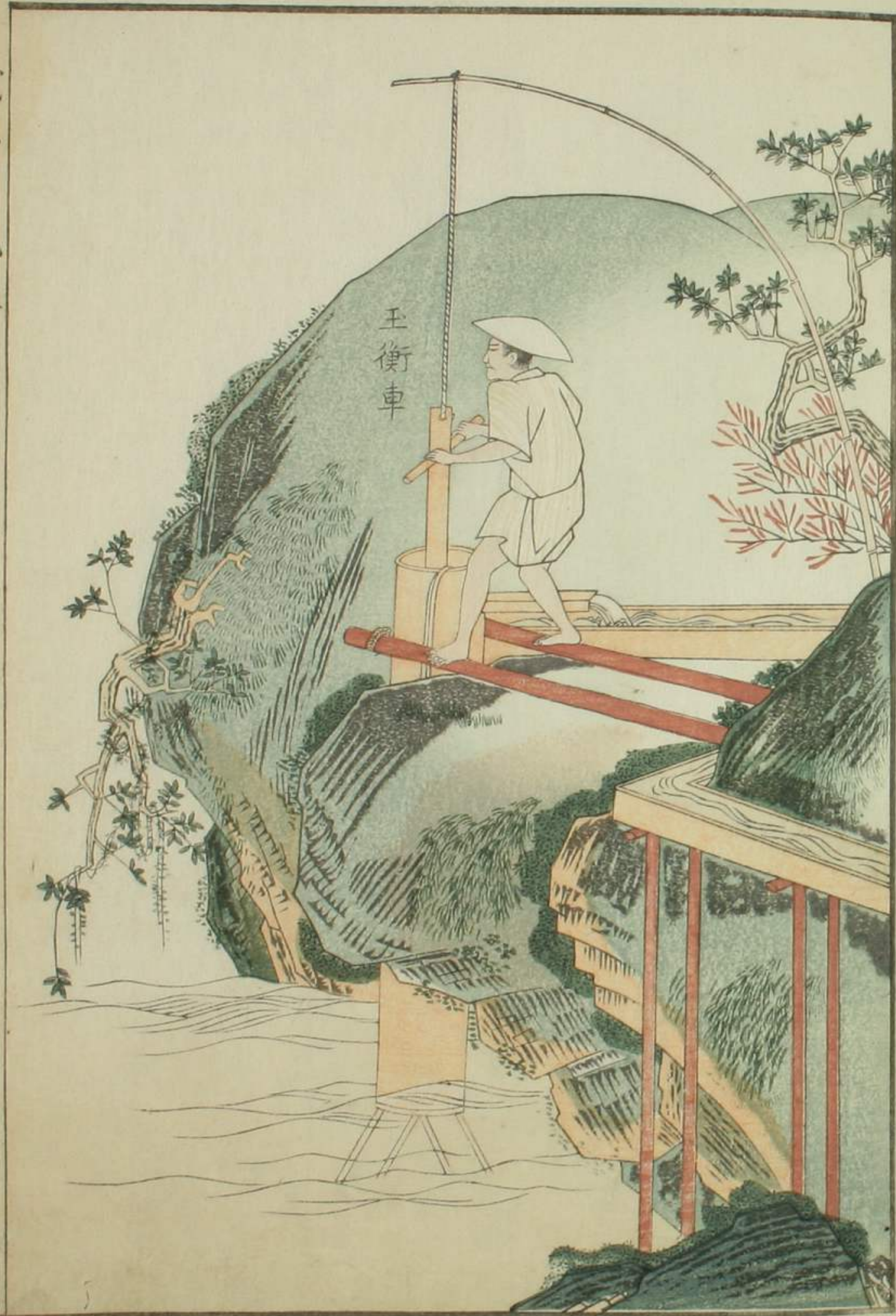
成形圖說卷之十二

四十三

龍尾車ハ河邊まで水と引揚るの器あり累接して水と  
 上れを山をも引くまじし是一人の力と以て田二十  
 畝と云ふは其の功とまじし一此の肉子螺旋の孔道  
 あり外ハ圍して水と漉さるる旋子轉り升る長一丈と  
 れハ水の高低は是三四五の句股の法ありこれと  
 一え各升るを横斜の度引り一人まを  
 龍車ハ山陽道よりりりり水田に用ひ黒也方一間許の  
 箱の底と咬違ふ昇るると川は幅之浅く依て箱中に螺  
 鈹の板と箱柄と附て押とさハ板窄引ハ板闊くやう  
 小して各其勢につもそ升るあり柄の端は拐あり

玉衡車を井泉の水と挹シりくも水潭の製のまろくふし  
 て田畝の旱の何ニも一井を以てみと灌ソクを敷畝と温カキへ  
 し一人もて一畝と動せも百泉送工して高ニも升ニもいり  
 ある大旱ニありとも敷井と合て人力相代り汲取らぬ  
 町の田とも乾涸カラサざるや是江河泉間の多クして高ニも  
 上ニも越スるゆへ屈曲の盤道とも致マしむつきの様巧なり

水碓ミツウス書紀  
 水車ミヅウマ曰



宋耕織

圖

娟々月過  
璫簌々風  
吹葉田家  
當此時  
村春響  
相答  
行聞  
炊玉  
香會  
見流  
匙滑



槽碓

更須

水轉輪

地碓勞

蹴弱

金葉集

早き澗

乃れ

乃れ

乃れ

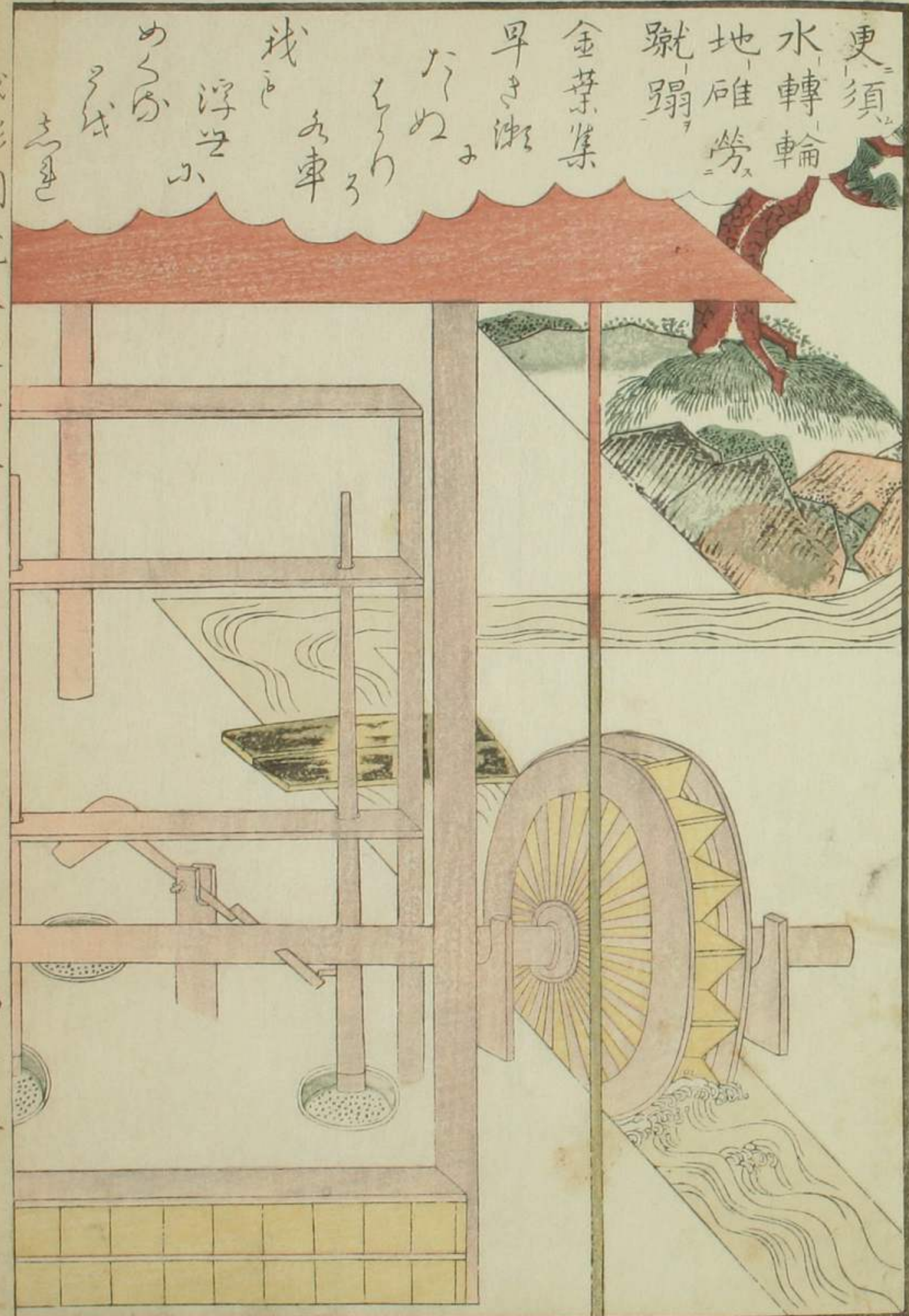
乃れ

乃れ

乃れ

成形圖說卷之十二

四十五



水碓 增續韻府○三才圖會機碓水搗器也桓譚新論水碓  
激使自春即其遺制也又輻車水磨水磑水  
磑水轉磑也水轉碾也ふとろろり

蕃名スダムプモ一レニ  
天智紀九年造水碓而治鐵式キツク也此事載ラルハ又生鏝アラカチ

と派陳チ子シ用ウ山城志曰於堰渠作水車轉磨磑

曾布豆 島威シマノの曾富騰ニ出ル足動カカシテ自春ウ子  
此者ウハレ俗ノ玄賓ハハレ今備中國曾布豆谷

水鳴子 此者ウハレ俗ノ玄賓ハハレ今備中國曾布豆谷  
曾布豆 碓ウ左俗言

槽碓 三才圖會碓梢作槽受水以為春也凡所居之地間有  
減細後梢深潤為槽可貯水斗餘上此以厦槽在厦外乃自  
上流用笕引水下注於槽水滿則後重而前起水瀉則後輕

而前落即為一春如此晝夜不止可得米  
兩斛リ日省ニ工ヲ以歲月積之知非小利  
承澗流為小碓水滿勺碓首印起就ハ白  
自春遲速小異功倍杵眷俗謂之勺  
蕃名シケツプスダムプル

水臬 天智紀十年獻水臬○漢  
語鈔準純の字と訓ゆ

壅準 水臬 水繩

水平 通典木槽長二尺四寸兩頭及中間鑿為三池三池各  
三齒齊平則為天下準置照版度竿亦以白繩計其平則高  
下丈尺分寸可知謂之水○斫義補疏家謂以水平地於  
四角立四柱於四柱以水望其高下即知地之高下準繩  
然後平高就下而地乃平殆今世所謂水平也與準繩  
孟子○前漢律歷志繩直生準準者所以揆平取正也○繫  
音鬻又與闌同考工記匠人建國水地置繫以縣疏繫柱也

以縣者欲取柱之景先須柱正欲柱正當以繩  
 縣而垂於柱之四角四中繩皆附柱則柱正矣  
 蕃名ワアトルパス

凡平原の地は新ふ渠漕と疏さんところよりの地面乃  
 高低ともりぐさき時ハ夜中を將に極らんとするの地  
 面の一町或ハ半町毎に篝火を燃し川上川下より之を  
 望み觀るに其火光の高低を察して地面の隆夷を審み  
 測し又川流の淤泥を浚つは舟の土を篝火を焚て  
 其火光をともきんて川面の淺深を識みとあり漢溝洫  
 志觀地形令水工準高下河内圖會譽田八幡宮四季神  
 事の中正月十四日月形を以て油物を入板子目と





と申年中此水斗何合と云ふ是祢宜の役あり

水脈津籤ミツツツシ 萬葉集マンヤクシウ 水ミ 御石ミイシ と填ミ とはも咫シ 八尺ハシチ の義訓ミ ありしは本と立タテ 玄ソコ 深コ の深コ 淵フミ とはもミ 寸シ と志シ 衛石ヱイシ と書カキ るは石イシ 表ヒラカ と樹キ しミ ありきんと云イハ らし

水尾木ミヅオキ 舒明シュメイ 紀キ の字ジ 水ミ 表ヒラカ 政シ とある水ミ 表ヒラカ 遠方トウホウ の淵フミ あり

亦深遠オホコト と水ミ 楸ツ 水尺ミヅシ 水則ミヅノチ 西シ 湖ウミ 志シ 吳ウ 越エ 王ウ 錢ゼン 鏐リウ 築キ 塘トウ 以ヨリ 捍ヘ 江カ 水ミ 置シ 鐵テツ 幢トウ 三サン 以ヨリ 為シ 水ミ 則チ 則チ 幢トウ 製シ 如ニ 杵シ 徑キョウ 七シチ 八ハチ 寸シユ 出デ 土ツチ 可カ 三サン 尺シツ 餘ヨリ 其ソノ 趾シ 入イ 土ツチ 不フ 知チ

若ニハ 于コ 蕃名フキナ メートメート パパ ル

類聚國史難波江始立ニハツクシ 濇標ニハツクシ ○雜式ニハツクシ 曰凡難波津頭海中立ニハツクシ 濇標ニハツクシ 若有舊標ニハツクシ 朽折クセ 者ノ 搜求ソウソウ 拔ハキ 去サ 之ノ 學マナブ 曰水尾津ミヅオキ 津ツ 葉遠トホ 津ツ 淡海タンカイ 佐細サホ 江カ ありしは本と立タテ 玄ソコ 深コ の深コ 淵フミ とはもミ 寸シ と志シ 衛石ヱイシ と書カキ るは石イシ 表ヒラカ と樹キ しミ ありきんと云イハ らし

成形圖說卷之十二終

